

中国の革命と文学9

小野忍 編 平凡社

延安の
思い出





中国の革命と文学9
小野忍 編 平凡社

延安の思い出

延安の思い出

中国の革命と文学9

昭和47年4月10日 初版第1刷発行

定 価 600円

編 者 小野 忍

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社平凡社

東京都千代田区四番町4番地／郵便番号 102
振替 東京29639／電話 03-265-0451

印刷 東洋印刷株式会社／製本 株式会社石津製本所

© 株式会社 平凡社 1972

0397-322090-7600

目次

延安訪問記

陳
野
美
代
子
昭
作
訳

第一章	延安への旅	三
第二章	延安の第一印象	六
第三章	訪問と参観	六
第四章	さまざまな集会	二六
第五章	延安スケッチ	二四

延安十年

新柯
島
淳
良藍
訳作

一、 辺区に入る	二〇三
二、 労働を迎える	二一八
三、 大衆の中へ	二三九
四、 陝北の江南	二三八
五、 韓起祥とともに	二四四
六、 金盆区 チンベン の山にいた頃	二六七

延安の回憶

新何
島 淳 其
良芳 訳作

延安への路上にて……………二七

私は延安をうたう……………二六

ある平凡な物語……………二六

延安回憶……………二七

延安の毛沢東

新翟
島 淳 作
良軍 訳作
三七

解

説

.....

三六五

延安訪問記

陳野
中野
昭子
現代
學作
訳

第一章 延安への旅

重慶から成都まで

抗日統一戦線が結成されたばかりのころ、延安は、内外の新聞記者たち、たとえば「大公報」記者の范長江氏（のち「人民日報」社長となった）アメリカ人記者のエドガー・スノー氏（一九三六年外国人としてはじめて延安にはいる。「中国の赤い星」の著者）などの訪問やら、性格を異にする

さまざまな団体の参観、また、ひとりふたりと単独で探訪に来る者などでにぎわっていた。おおむねは次第に国事に関心を抱きつつあった人びとで、そのころの延安を紹介することに、ある種のイメージを抱いていたらしかった。その後、蘆溝橋事件が勃発し、わが国は強敵のたえまない侵略に抵抗するため、神聖な全面抵抗戦争の体制をとり、かつての赤軍も編成がえされて国民革命第八路軍（すなわち第十八集團軍の一部・原注）となつて、山西省一帯の戦線に参じた。その第一回は昨年（一九三七年）九月二十五日の平型関^{ピンギョウカン}での戦いで、これによって全国的な賞賛をかちえたのである。しかしまた一方では、抗戦もすでに一年あまりになるのに、一般の人びとにとっては、延安は依然として神秘のベールに包まれてお

り、一幅の絵画のほんの隅っこが見えるだけで全体が見えないのに似ていた。延安というのは、かくも神秘不可思議なところなのだろうか。統一戦線後の延安には何か変化があったはずではないのか。また、抗戦中の延安はいったいどんな姿なのだろう。特に、そこにいる人びとはどういうふうに暮らしているのだろう。これらの疑問は、すべて私が知りたいと思いがちでも知りえないものだった。かくて、私は、延安まで行ってみて、短期間でも滞在してみようと決意したのだ。そうすれば、これらの疑問も、あるいははっきりした答えを得ることができると私は考えた。

人は、「蜀道の難きは青天に上るより難し」（李白の詩「蜀道難」の最初の一句。蜀は四川省の異名）と言う。しかし、私自身の体験では、四川省への道はさほど困難ではない。私は御用船に乗り込むチャンスを選ってしまったが、それでも何とかして船の切符を買い、外国船に乗ったなら、漢口を出発して九日もすれば重慶に着くことができる（これは去年の十二月のことだ）。さて、重慶の波止場の石段を登るのは、そのとき四川省入りした人にとって、おそらく、ひどくやりきれないことだろう。そのほか、骨と皮ばかりに痩せこけた轎かきも、なんとも異様な感じを抱かせたに違いない。

重慶には、全部で二カ月近く滞在した。そのあいまには、涪陵^{フーレイ}のいなかで四カ月あまりを過ごした。私が四川省の片い

なかで暮らしたことは、たいへん楽しいことだった。生まれてこのかた、そのような農村に近づいてみたこともなかったのだから。あたりにはただ、ポツンポツンとわらぶきの家があるだけで、店ひとつない。せまい山道を往き来するのは、はだして畑仕事をする男女だけ。彼らは、じつに素朴で、朗らかで、辛苦に耐えてよく働いた。それに、彼らの貧しさといったら、江浙（江蘇省と浙江省）あたりの農民とは比較にならない。まったく、四川に行かなければ、四川の農村の貧苦はわからない。江浙の農民なら、時には絹ものや毛皮を着ることが出来る。雨が降れば、長靴ぐらいははく。ところが、四川の農民の暮らしは、江浙の農民など想像もできないものなのだ。食べものといえば、雑穀、ソラマメ、山芋。トウモロコシなどはまだいいほうである。着るものも、つぎはぎしてごろごろしたぼろだ。ところが涪陵から三百里（約一七三キロ）ほどの重慶となると、何もかもちがってくる。避難民があとからあとからやって来て、旅館は超満員だし、街路といわず、商店といわず、食堂といわず、人で溢れていない所はひとつもない。上海の屋根裏の部屋ほどの広さもなく、しかもひどく暗いの、ひと月に十五円もの部屋代を、それも先払いといった部屋ばかり。派手な服装の老若男女がおおぜい街や劇場の前を、ぞろぞろと歩いたり、立ったりして、何か盛大な会でもあるのかと思うほどだ。レストランの入口には、「防空」と書いた札をぶら下げた自動車（自動車）がずらりととまっている。青年会のそばの北京料理店（北京料理店）燕市酒家

などは、土曜の夜ともなると、五時前ならともかく、そうでなければ席ひとつも空いていない。みんながお金をばらまき、みんながしこたまもうけるというわけだ。だが、もしもそんな感情があれば、誰だって何かしら変な感じになるにちがいない。つまり、重慶の生活はマラリア病のようなもので、健康なまともな生活ではない、すべてがマラリアにかかっている、といった感じなのだ。正直のところ、私は重慶でのこのような生活は好まなかった。戦時であるべき姿ではない。ましてや、外国の侵略に抵抗すべき自衛戦のときに、このような現象はまことに恥ずべきものだった。私は、すぐにも重慶を離れたいと思ったが、一方では未練のこった。友人たちは、まったくよくしてくれた。私を迎えに出る途中、渡船が坐礁し、あやうく溺れかかったという済安と趙学広、それに彼の奥さんに対しては、申し訳なくて、ひどい不安かられたものだ。十年あまりも別れていた鴻明姉とも、思いがけなく重慶で逢うことができた。彼女が、重慶にとどまるよう熱心に勧めてくれたことに、心から感謝したが、やはり私は出かけた。鴻明よ、あなたもきつと私を許してくれたことと思う。

重慶から成都までの公路（国道）は、毎日、自動車（自動車）がせいぜい三台しか通らないので、通行客はすでに八月初めの分まで予約されている。何ごともすべて情実が幅をきかせているとはいえ、ずっと待つなんてやりきれない。かといって、脚

路^ル（賄賂）を介して不正手段に出ることのたときを行くべく、切符を工面する気にもなれなかった（というのは、賄賂の上には上ありで、最大の「袖の下」でもつかませなければどうせだめなのだから）。そういった手続に通じている友人の助言で、うまい方法をひとつ思いついた。つまり、重慶から嘉定^{チヤン}まで船に乗り、嘉定からはバスで成都に向かうというのである。これは、まわり道であったが、私たちは、こんな遠まわりをする人は、たぶんそうたくさんはあまり、と見当をつけた。

六月三十日の午後五時、私は××会社の汽船に乗り込んだが、私の予想に反して、三等室もとうに超満員で、すきまひとつない。人びとは、午後一時にはやって来て席をとっていたのだ。どうしようもない、やむなく煙突のかたわらに、寝るだけの場所をしつらえ、なんとか一晚を過ごした。翌朝の五時、出帆。エンジンの音と、煙突から噴き出す蒸気に驚いて目をさました。風もあるのだが、蒸気にあたって頭がふらふらする。が、なんといつてもがっかりしたのは、乗客の大半が長旅だということだった。のみならず、嘉定からさらに成都まで行くという南渝^{ナンユ}中学の生徒がかなりいるのには驚いた。

七月一日の夜、瀘^ル県に到着。ここは、ある友人の郷里なので、よけいに興味ぶかくもあって上陸し、公園の中をひとまわりしてから夕食を食べに出かけた。瀘県の通りは幅がひろく、街も景気がいいし、人もかなり多い。すべてが私の予想

以上だった。私は、ある土地に行ったらその物価をしらべるくせがあり、ここでも、さっそく一軒の雜貨店にはいった。重慶ではひどく高かった化粧石鹼も、瀘県ではまだそれほどでなく、とくにやかんは、漢口よりも安かった。それらほもちろん、古い品物ばかりだったが、それでもまだ値上がりしていないのはなぜだろう。賄賂が限られているからか、瀘県の人が相場を知らないからなのだろう。結局、私は化粧石鹼をいくつか買い込んで船にもどった。その夜、船は瀘県に停泊した。瀘県は山の中の町ではあるが、はうように急な石段がないので、私にはきわめてよい印象を与えてくれた。

私の乗り込んだ汽船の標識は、嘉定までの直行とあり、会社に問い合わせても同様の答えであった。ところが、船が叙府^{シヨフ}に着くや、船員たちは、水かさが少なくて運航できないという口実で、乗客を全部おろしてしまった。夜になったら乗客たちに切符をとりかえさせ、嘉定にすでに待機している小型汽船が下ってくるから、揚子江を溯行する人は、みなすぐその船に乗れると説明した。それまでの船はいえ、あくる日、夜明けとともに重慶へ帰ってしまった。

乗客たちはみな船をおり、荷物を倉庫船に移して、小型汽船の到着を待った。一晚過ぎて、あくる朝になっても、小型汽船はいっこうに来ないので、みんなもそろそろ後悔し、憤慨しはじめた。かといって、いままでの船はとうに帰ってしまったのだから、いったいどこに行つて話をつけたらいいのだろう。倉庫船の人は責任を負うわけにいかないのだから。

その夜は、みんな倉庫船の床板にごろごろと横になって寝た。南京虫が、床から壁板のすきまからと、あちこちから押し寄せてくる。ぐっとつかまえると、十数匹はいるだろう。

その数にはすっかりたまげてしまった。その夜、私はまんじりともせず、ひっきりなしに南京虫をつかまえていたが、他の連中もやはり安眠できず、みんなため息をついたり、ボリボリ掻いたり、あの船の事務員をうらんだりしていた。

小型汽船は、翌日の夜の七時にやっと到着した。これがわれわれの乗りかえるべき潮行船だ。なんとも、まことに小さな船で、二等室はなく、みんな干物のようにせま苦しい三等室に重なりあつた。荷物を運び込み、席をとり、一息入れるまもなく、ボーイが検札にやってくる。われわれ乗るかえの船客といさかいは始めた。われわれ乗るかえ組の三十人あまりは、叙府の民生公司（シヨウシヤ）（外国汽船会社に対抗する四川省の中国系船会社の名）が言明したことだが、座席を占める優先権があり、われわれが席に落ちついてから、まだあきがあるようだったら、切符を発売するはずだった。ところが、会社側はその約束を破り、切符を幾枚でも発売した。おまけに、新しい乗客は、小型汽船が着くとすぐわれがちに乗り込んでしまい、おかげで、われわれ乗るかえ組は、ギューギュー詰めで足も伸ばせない。それでもわれわれは慨嘆するだけで正式に抗議もしなかった。ところが会社側は、たぶん五十銭の食費の払い戻しがおもしろくなかったのだらう、ボーイをよこしてわれわれにケチをつけさせた。というのが、われわれ

の中のひとり（もと某大学教授だった人）が、さっさと先に乗り込んでよい席を陣どった。よい席というのは、三等室の床の上の高くて長い台の上なのだが、彼がいとも満足げにそこにふとんを敷いているところへ、ボーイが検札に来た。ボーイは彼の切符をしらべると、よそへ移るように言い、そこは船員の寝るところだと言明した。そこで喧嘩が始まったのだ。われわれ乗るかえ組は全員のことらず、その大学教授の味方になった。

ところで、叙府から乗り込んだ連中のなかに、ふたりの婆さんがいた。彼女らは峨眉山（イボシヤン）（四川省の有名な山）へお参りに行くとかで、線香をいっぱい詰めた大きなバスケットを持っており、そのバスケットや大小の包みなどで、自分たちのまわりを、鉄条網を敷設したみたいにとりかこみ、その内側ですわたり寝ころんだりしていた。ふたりでたつぷり五人分は占領していただろう。みんな腹の中ではおもしろくなかったが、年が年なので、大目に見てやっていた。ひとりの学生が、そのバスケットをもうちょつとずらしてくださいと頼んだが、婆さんたちは大声でわめきちらし、逆にそのバスケットを学生のほうに押しやるので、その学生も笑って黙るよりほかなかった。われわれは、ボーイに、そのおふたりのお寺参りのご老人を優待して、事務長室のほうにお移りいただいたらどうか、われわれは、決してその台を占領したいわけじゃない、下に空席さえあれば、大学教授だってすぐおりるだらう、と言ってやった。

「わたしたちでは、どうしようもないんです」

とボーイは答えた。

「じゃ聞くがね、袖の下をもらえば何とかなるんだらうさ」

と、乗客のひとりが言った。どっと爆笑が起り、ボーイはやむなく出て行った。

しばらくすると、拳銃を背にした水上警察員がふたりやって来、大学教授に言った。

「ここは、われわれの席なんだ。おりろ、おりろ」

「あんたがたは、この船の乗組員かね」

「お前の知ったことじゃない。おりろと言ってるんだ」

威丈高な、しかもごろつきのような調子だった。大学教授ひとりではとうていあしらえきれない。水上警察員が強引にひきずりおろそうとするので、われわれがみんなて対抗した。おおぜいの人の力というのは、しょせんバカにできない。そのふたりのごろつきも、仕方なくブリブリしながら行ってしまった。このふんではまだ三度目のいざこざがあるだろうと、みんなまぢかまえていたが、それはなかった。

船上ではみんな、食べては寝、寝ては食べ、それ以外にすることといったら、だいたいそれと似たりよったりのも、もつとも物質的なことばかりだ。本や雑誌を見つけて来て読んだり——船には書庫があった——ほんやり景色を眺めたりしている者もいるが、それこそ寝てばかりというのもある。

私のそばに鎮江^{チンジャン}人の一家がいた。子供ふたりと甥ひとりをつれれた老夫婦で、これがまたちょっとでもきつかけがある

と、自分たちの流亡生活を嘆くのである。彼らは、敵機の機銃掃射のもとをのがれて来た連中で、南京でひらいていた店も敵に占領されてしまったのだった。その老夫婦は、店の帳簿を持って来なかったというので、いく度となく互いに責めあい、いさかいしていた。

「いや、けっこうですよ。あんたがたは命拾いをしただけでも好運だったんです」

と、あたりの人が元気づけていた。

叙府から嘉定に至る岷江^{ミジヤン}の流れは、溯行するにつれてますます激しくなる。ひとつまたひとつと、大きな渦巻を見てみると、頭がクラクラしてしまふ。ひどい揺れのため、船酔いしてしまった人もいた。もっと恐ろしいのは、船が酔っぱらいのようにあちらへふらり、こちらへふらりすることだ。幾度となく、船尾が岸辺の岩にぶつかりそうになる。木の枝が、私たちの顔をさつとかすめていくと、みんなほっとするのだった。四川特有の、筆先のように屹立したすばらしい山、山腹のトウモロコシ、サトウキビ、麦、それに高粱などがはつきりと見えるのだが、死の恐怖がまるで暴風雨のインド洋にいるみたいにしゅっちゅう迫ってくる。

岷江沿いの岡の上に、時あつて農夫がひとり腰をおろしたりもしていたが、そののんびりした風情は、王維（唐代の詩人で南画の開祖）の詩に描かれた風景を思い出させる。とはいえ、ほんとうは、その農夫の風情がのんびりしているとい

うよりは、私の氣持がのんびりしていると云ったほうがいいだろう。そのあたり一帯の川面に、木造の舟が通ることもある。おおぜいがふたりずつ並んで漕いでいたが、水の勢いが強いので、流れにさらうのがたいへんで、いっせいに掛け声をかけながら必死に漕いでいた。そのうちのひとり、一条もまとわぬ裸体だった。われわれの小型汽船が通りすぎる時など、その舟はひどく揺れて、いまにもひっくりかえりそうになったが、聞けば、時にはほんとうにひっくりかえることもあるそうだ。

さて、かくてようやく、七月七日の午後五時ごろ、嘉定に着いた。巨大な仏像が山頂はるかたかたかと刻まれ、岷江をへだててはるか嘉定の市街に對している。これが嘉定のシンボルである。船は川のまん中に停泊し、乗客たちはボートで岸まで渡る。船の上から嘉定を望むと、まことにちっぽけな山中の町である。ちっぽけとは言っても、四川奥地ではこれだけっこう大きな山中の都会なのだ。ひとしきりごたごたがあったから、私も荷物を手にして川を渡り上陸した。上陸すると、きびしい尋問と身体検査を受けたが、それも漢奸のスパイ活動を防止するためとあっては、また当然のことであろう。だが、なぜか四川訛りのない乗客に対しては、尋問が特にきびしかった。彼らはまるで、わが国の抗戦も、今回の侵略戦争に抵抗するために同胞たちが大移動をやっているといふことも知らないかのような調子で取り調べていた。検査が

すっかり終ってから、人力車に荷物を積んで旅館にむかった。私は、創業したばかりの東園賓館という旅館に泊まった。草花や木の植えこみでいっぱい庭があり、あずまやや嘉陵江に面していて、眺望はまことにすばらしいのだが、部屋はひとつも空いていない。そこで、年若いふたりの連れ(南瀛中学の生徒)がこの土地のことばを話すのをさいわい、旅館の主人と交渉してもらったところ、ちっぽけな部屋を貸してあげようと承諾してくれた。ベッドがないので、私には帆布張りの簡易ベッドをくれたが、そのふたりの生徒は、あずまやの空き間の床に寝ることにした。

旅館の庭で夕食を食べた。魚を食べたのだが、重慶にくらべると安い。夕食がすむとすぐに成都行きのバスのことを調べに出かけた。嘉定の街にはアスファルト舗装の大きな通りが一本あり、その両側の店もみなけっこう整然としていた。バス停留所は城外にある。そこでいろいろたずねてみたが、成都へ行く希望はすべて、深い海底に投げ込まれてしまった。バス停留所の連中の回答はこうだ。

「バスはかならずあるとは限りませんよ。いちばん多いときで三台ですからね。場合によっては二台のことも、一台のこともあるんです。ここじゃ予約の手続は要りません。もとほしていたのですが、予約した人が切符を買えないことになりましたね、予約していない人が横どりするもんですから。そういうわけで、予約しなくなりました。予約したってむだですよ」

「じゃ、いったいどうすればよいのかしら？」

「いまは番号札をくばっているんです。朝の五時に番号札をくばって、六時に切符を売ります。でもお客さんは、夜中の十一時、十二時から切符の売場に来て待っているんですよ。板をもつて来て、体裁かまわず切符売場の外で寝る人もあれば、歌をうたう人もある、おしゃべりをする人もあるというわけです。どうしたもんでしょうねえ。おかげで、わたしどもは眠ろうたつて眠れやしません」

停留所の職員は笑いながらそう言って、しかめつらをして見せた。

「あなたもご存じでしょうが、いまこの街の旅館には、まだ三百人からの人が残っているんですよ。成都行きのバスに乗るのを待ってね」そして続けて、「まあ、あなたがたの幸運をためしてごらんなさい。早目に来て番号札をひったくればいいのですから」

旅館に帰って、あれこれ相談したが、どうやら、明日は出発できそうもないという公算が大きかった。が、ともかく相談の結果、私の若い道づれである生徒ふたりが早く起きて番号札をとりに行く、私は宿に残って荷物の番をするということになった。もしも、一人分だけ取れた場合は、私が先に発つ。というのは、私の所持金がいへん乏しかったので、車を持つためにここにどまるとなれば、どうしても、成都へ送金依頼の電報を打たねばならなかったからだ。もし二人分取れば、彼らのうち一人が残る。三人分なら——それなら

もちろん文句はないわけだ。また、一枚も手にはいらないければ、人力車で成都まで行くよりほかはない。旅館の主人は、人力車がよいときりにすすめ、このごろでは、バスに乗れなくて人力車で行く人がずいぶん多いですよと言う。ところがその道は、むかし山賊が出没していたところだ。このごろでは強盗事件もすこしは減ったが、何といつてもたいへんだろう。しかし私は、それだって運にすぎるしかないと思った。バスに乗ったところで強盗にやられることはありうる。車をとめられてしまえば、車中の人はいずれもまる腰の旅人なのだから。というわけで、私も番号札が手にはいらないければ、人力車に乗ろうと主張した。

十二時ごろ、旅館の中がそうぞうしくなった。早くも番号札をとりに出かける人がいるのだ。ふたりの若い道づれも、あわててバスの停留所に出かけた。私は庭の中をしばらくぶらぶらしてから茶室に行き、腰かけたり景色を眺めたりしていた。岷江の流れが一筋の細い光を放っている。曉風、残月、まばらな星影——まるで柳永の詞に描かれた風景そっくりだった。一瞬、限らない思い出がよみがえり、銭塘江、浜江、さらにはかなライン川まで思い出した。やがて、望郷の思いにとらわれ、やがてまた、ゲーテやツルゲーネフの自然の感懐へと引き込まれて行く。私は自分を慰めた。「何といつても、わたしは祖国の土の上にいるのだ。自分の土を踏んでいるのだ。そう、これはわたしたちの土だ！」目がしらが熱くなり、感激の涙がこぼれる。私は自分の土をし

っかり踏みしめていさえすればよいのだ。

五時過ぎになると、空はすっかり明るくなった。最初に番号札をとりに行った人が帰って来て、

「いっぱいの人ですよ。あなたのお仲間はまあ前のほうですから、見込みがあるかもしれませんからね」そして言った。

「どうやら今日は番号札をくばらないようです。わたしは、もう待ってるのがいやになって……」

六時ごろ、ふたりの若い連れが帰って来た。走って来たのでハアハア喘いで、汗びっしょり、制服のボタンもはずして

いる。

「番号札はとれて？」と、私はいきなりたずねた。
 「番号札なんぞあるもんですか。バスは停留所の伍所長が借り切ってしまいました」と、彼らは憤慨しながら言った。

「だけど、切符売場の窓口を叩きこわしてやりました。今日もし番号札をくばっていれば、ぼくたちはきつと手に入れられたんです。ぼくたちの前にはそうたくさんはいなかったんですからね。それがしゃくなことに、かんじんのバスが貸し切りになっちまって。みんなたちまち怒り出して、切符売場の窓口を全部ぶちこわしてしまいましたよ。ぼくたちもそれに加わったんです。おかげいでそのバスを占領してしまうやら、停留所に立ったまま番号札をくばるのを待っている人もあるやらで、ぼくたちは、もう見込みなしと見て帰って来ただんです。人力車で行くことにしましょう」

私たちは人力車に乗ることに決めた。車を呼ぶ相談をして

いるところへ、また三人が番号札を手に入れられないままにもどって来て、私たちに加わって相談しはじめた。

彼ら三人も人力車で出かけようと主張した。宿でただ待ってみたところで、明日バスがあるかどうかははっきりしないし、番号札を手に入れることができるかどうかともわからない。何もかも不確かだから、というわけだ。結局、私とふたりの中学生は、その三人といっしょに出かけることにした。

私たちは人力車を六輛やとった。まず眉山に行き、眉山でまた車を乗りかえて成都まで、という計画である。眉山までの車賃は四円（バスなら嘉定から成都まで七円六十銭）で、路程は約四百里（二三〇キロ）、成都までのちょうど半分の距離である。

出発の時は、もう八時に近かったが、車夫は、急げば今日じゅうに眉山に着けると言う。

私たちの人力車がバス停留所を通ると、その入口の前はおおぜいの人でうまっていた。

バスが一台とまっているが、腰かけているもの、立っているもの、超満員だ。停留所の前の空地には、ふとんやらトラंकやらが山と積まれ、汽船でいっしょだった大学教授が手持ちぶさたな面持ちで、荷物を腰をおろしていた。私の車が通りかかるのを見ると、大声で私に呼びかけ手を振った。

「陳さん、陳さん。成都までいらっしやるのですか」

「ええ、わたしほんやり待っていたくありませんもの。あなたは人力車にお乗りになりますの」